滞　歐　雜　記　帳（その二十二）

工學士　山　本　峰　雄[1]

15. 戰禍逃避行（三）

九月1日遂に獨逸軍はポーランドに侵入し，同時に6都市が獨逸の誇る空軍の翼下に蹂躙された。そして2日には英國は豫てから計畫されて居た通り 60 萬人の兒童を倫敦から退去させ，倫敦の日本人もダブリンに逃れたのであつた。

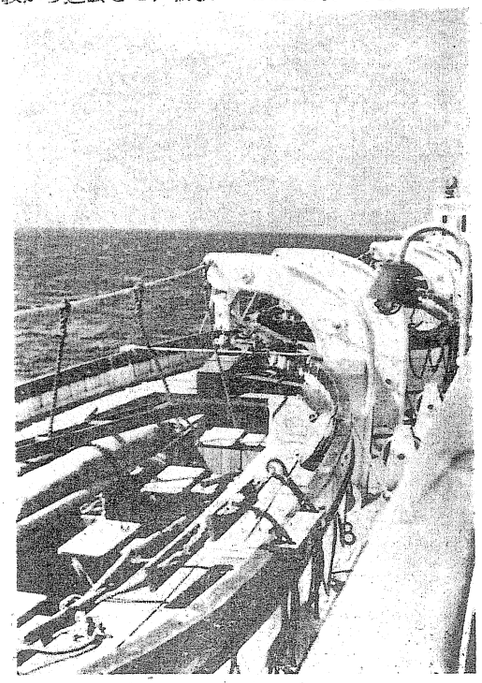
9月3日の朝我々は朝食後スモーキング・ルームのラジオの前に集まつて，英國からの放送を待つて居た。

10 時 15分英國首相チェンバレンの例に依つて力の無いしやがれ聲がスピーカーに入つて來た。「英國は獨逸とポーランド問題に就いて平和的解決を計つて百方努力したが，獨逸は今やポーランドに侵入するに至つた。……我々は茲に我英國と獨逸とが交戰狀態に在る事を宣言する。……神よ我々に勝利を惠み給へ。」

チェンバレンの聲は悲痛其のものであつた。言葉は所々とぎれて重苦しい沈默が彼の演說を區切つて居た。戰備無き英國は遂に起たざるを得ないのである。

スモーキング・ルームは彼の一語毎に緊張を增した。遂に來るべきものは來たのだ。21年目に歐洲は再び戰禍の中に入つたのである。

其の日の午後英國の皇帝はチェンバレンと同じ放送を行つた。



第 7 圖　逃避準備完了した救命艇（著者）

此の放送の直後遂に靖國丸は明日正午出帆と決定した。燃料と食糧は遂に積込めなかつたが然かも紐育迄は何とかして航海出來るのである。

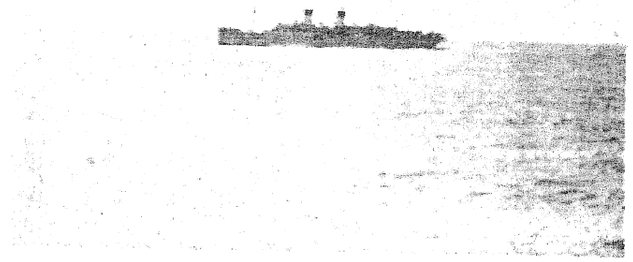
9月4日のあはただしい朝，我々船客と船員は靖國丸の船腹に畫かれた日章旗の下に竝んで最後の記念撮影を行つた後，纜を解いてベルゲンの埠頭を離れた。只1人殘るH書記官はさびしい姿を埠頭の風にさらして帽子を振つて居る。外にはノールウェー人の二，三人が他人事の如くうつろに我々の船を見送つて居る許りであつた。2時間の繪の如きフィヨルドの中の航海をへて午後2時半遂に外洋に出た。遂に我々は運命を天に委ねて戰禍の大西洋の荒波に乘出したのである。既に前檣の上と船首と船橋の左右には浮流水雷の見張りが立つてどんよりと乳色に曇つて來た空の下に荒れ狂ふ海面を見張つて居る。救命艇のカバーは全部外されて食糧品を詰めた木箱と飲料水の樽が積込まれて風の中に不氣味に待機して居る。船室ではボーイが救命ブイを取出して寢臺の枕下の棚にいつでも着用出來る樣に用意してしまつた。

出港に先だちH書記官と事務長はベルゲンの英國領事館に靖國丸の保獲を依頼してあるので前途は多分惡ないと考へて安心して居りのであるが，宣戰布告と共に大西洋は既に戰禍の中に突入してしまつた。英國の1萬5千噸の貨客船が英國北西岸より 250 浬の沖に於て獨逸潛水艦と想像される潛水艦に依り擊沈されたと云ふ報が入り，次いで我々に先だつてベルゲンを出た英國の汽船もノールウェー海岸で擊沈されたと云ふニュースが入つて船內の緊張は高まつて來た。無電の發信は停止されてしまつた。

船はノールウェーの西岸を北上して海は次第に荒れて來た。之から3日の最も危險な航海がどうか無事である樣にと祈る氣持は誰も變らなかつた。

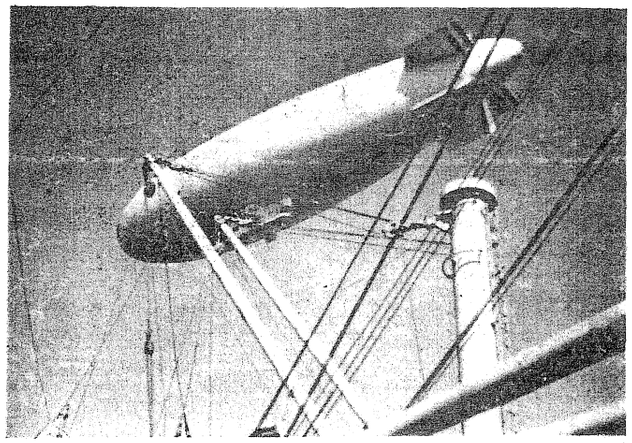
船客乘組員は何分の通知ある迄夜間と雖も何時にても甲板に集合出來る用意をなし置く事，集合の必要ある時はアラム・ベルを鳴らし汽笛は短聲6聲以上を長聲急鳴すべし外3箇條の注意書が船內に配布された。

嘗つて我々が紐育から獨逸に渡る際に乘船した獨逸最大の汽船ブレーメン號が英國に拿捕されたと云ふニュースは我々を驚かせた。ブレーメン號はI氏を乘せて8月 23 日歐洲の風雲急な英國を出帆して大西洋を南下して形勢を視察した末紐育に着き此處で英，米合作の出港妨害運動の爲に出航が出來なかつたのであるが，8月 20 日遂に英國海軍の監視を逃れて大西洋に出たのであつた。



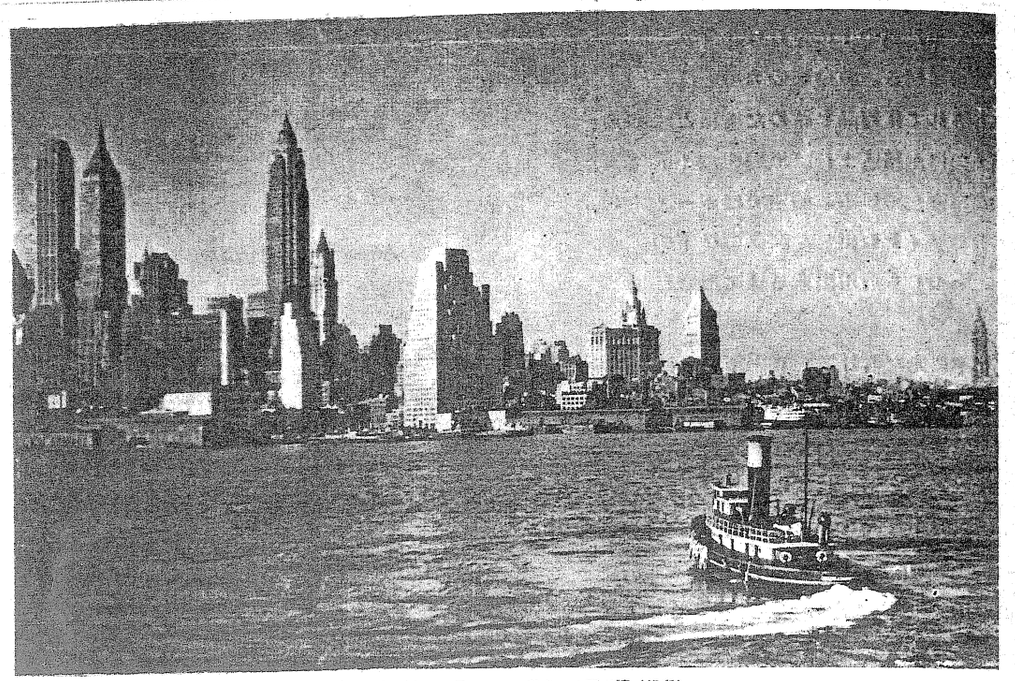
第 8 圖　イタリー汽船ローマ號の進水（著者）

然しブレーメンが英國に拿捕されたと云ふのは實は虛報であつて，此の時ブレーメン號は大西洋の霧にかくれて，水平線上の船影におびえながらジグザグの航路を一路ソ聯領ムルマンスクに向つて逃げつゝあつたのである。そして9月2日には我々に先だつてベルゲンを出た米國の哨戒艦キャンベル號を其の無電にキャッチして之を利用して



第 9 圖　標識をかすめる米國海軍哨戒飛行船（著者）

（1）航空研究所



第4圖　靖國丸から見たマンハツタンの摩天樓（著者）

難を免れて居たのであつた。

斯くて我々は獨逸の潜水艦の眼を逃れんとする英國船と英國海軍の監視をくぐる獨逸船との間を航海しつゝあつたのである。然し我々の出帆の日から紐育近く迄は遂に一つの船影をも大洋の中に見出す事が出來なかつた。全ては北大西洋の深い霧が波頭に洗はれる迄垂下がつて各自の行動をかくして呉れたのであつた。

歐洲の戰況ニュースは刻々と入つて來た。先づ獨逸の空軍の小部隊が倫敦を空襲したと云ふニュースが入つたのを始めとして，英國空軍がハンブルグを空襲し英國機がウイルヘルムスハーフエンに於て撃墜された事が判り，又佛國の空軍がライン・ランドを空襲したと云ふ事が電波に乘つて傳はつて來る。然し乍ら我々の豫期した獨逸空軍の大規模な倫敦空襲も無く，地上部隊の戰鬪も報ぜられないで，我々は些か拍子抜けのした思ひであつた。

9月5日正午には北緯 63 度 01 分，西徑5度 12 分の高緯度を通過して波は愈々荒く，風はリギングを鳴らして，霧は深くなつて來て居た。波頭を覆つたフエレー島沖の霧の中に鷗が低く怒波をかすめて滑翔飛行を行つて居るのが我々の唯一の慰めであつた。アイスランドからの冷い水は灰色にくすんで唯さへ憂鬱な避難者の心を暗くするのであつた。

ある霧の深い眞夜中であつた。深い眠りの中に突如轟く汽笛にすはと褥を蹴ると船はエンヂンを止めて怒濤の中に漂ひ始めた。キヤビンの廊下を甲板に上るあはただしい足音。私は次の瞬間に船が傾き始める事を豫期して舷窓の闇を見つめたのであつた。然し船は尙も汽笛を鳴らして大西洋の深夜に音も無く止つて居る。舷側をかむ怒濤の音と波の衝撃は私の不安をかきたてた。然かし間もなく此の汽笛は霧笛信號である事に氣がついて私は獨りでキヤビンの闇の中に安堵のといきをついたのであつた。

然し我々は遂に危險區域を突破した。9月 11 日には波は收まり，デツキから甲板迄しつとりと濡らした霧も霽れて，デツキチエアの上の讀書も樂になつて來た。

紐育到着後の計畫に話ははづんだ。ウォール街附近の料理屋でオイスターやチェリークラムを喰べる計畫，街角でオレンヂデュースのコップを飲みほしたいと云ふ者，支那料理の話から遂に日本料理の話に落ついた。

怒濤が靜まると夜の甲板は又樂しいものであつた。夜は滿天の星屑の下に更けて行つた。懐かしいプレアッヅの神秘的な光，アル，ニール，カペラの華かな星が我々の無事な航海を祝するかの如くである。金剛石の飾棚の如き星屑の下に船は何時迄も水平線上に淡く殘るアベントロートを追つてアンドロメダ座に向つて紐育へ紐育へと急ぐのであつた。

9月 13 日愈々紐育は近づいた。參戰して居ない伊太利の汽船ローマ號は白い船腹に國旗を誇いて我々と挨拶を交しながら行きちがつて行つた。

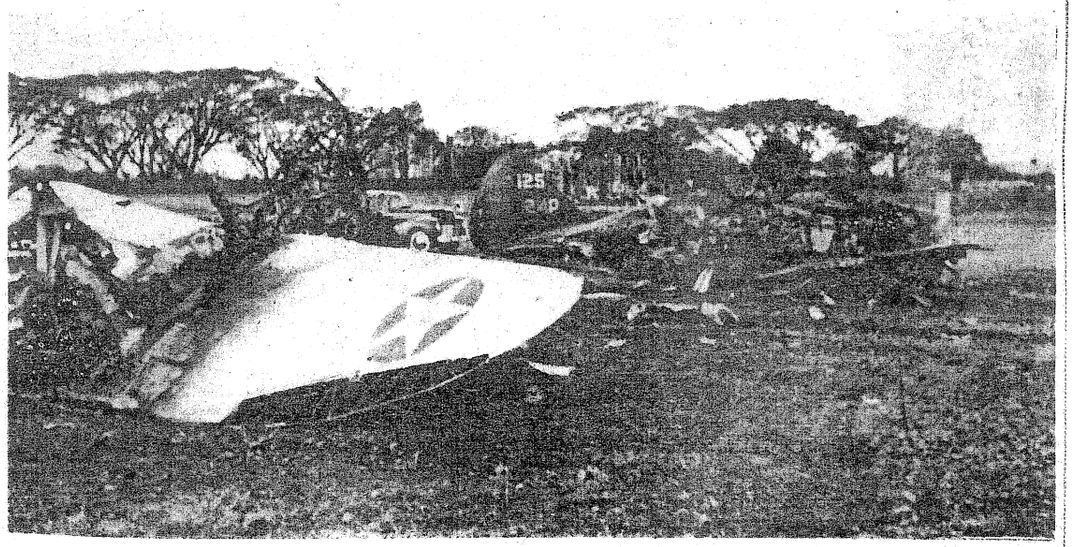
午後の一時を甲板の散歩に樂しんで居ると靖國丸の後檣に日章旗がするすると揚げられた。水平線に目を向けると其處に4本マストの巡洋艦が我々を目がけて波を蹴つて近づいて來る。そしてやがて船尾をまはつて再び水平線下に消えて行つた。米國の哨戒區域に入つたのである。

翌 14 日我々は西方遙かにロングアイランドの褐色の岸が煙霧の中に光つて居るのを認めて歡呼の聲を擧げたのである。米國海軍の双發型哨戒用飛行船は檣頭の日章旗をかすめて低空飛行を行つた後遙かに飛去つた。次いでコンソリデーテッド飛行艇が靖國丸の上空を旋回飛行して行つた。ロングアイランドの沖には米國海軍の艦艇が 10 數隻投錨して，米國の神經過敏さを語つて居る。

午後2時遂に我々はハドソン河の河口の檢疫所に入つた。左舷はるかに「自由の女神」が波の上に聳え，マンハツタンの摩天樓は行手の空をさへぎつて居る。

平和な碧空に大衆飲料ペプシコラの廣告がスカイライティングに依つて浮び出しつゝある。

我々は遂に戰禍を脫したのである。（終）



比島戰線にて爆破された敵機（陸軍省檢閲濟）